

緑の相談コーナーだより

NO. 308 2011. 2. 1発行

岩見沢市志文町 794 番地

いわみざわ室内公園「色彩館」

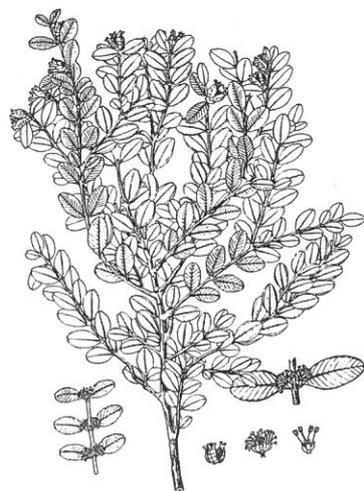
身近な樹木“ツゲ”(黄楊)

～イヌツゲ(モチノキ科)と間違われる樹～

一般に、北海道にも分布し、常緑の庭木としてよく用いられるイヌツゲをツゲの木と呼んでいますが、櫛を作るので著名なツゲは、一名ホンツゲといい、ツゲ科ツゲ属の常緑小高木です。高さは5m、直径30cmくらいになり、モチノキ科のイヌツゲとよく似ていますが、所属の科を異にする別の樹木です。イヌツゲの葉は互生で果実は黒色、球形のしょう果ですが、ツゲは葉が対生で、果実はさく果で、長さ1cmの開裂性で2つに裂けることから容易に識別できます。また、ツゲの分布域は温帯、暖帯に広く分布しますが、日本での北限は山形県の温海地方といわれます。特に石灰岩や蛇紋岩地の山に多く見られ、幹は灰白色で葉に光沢があり美しいことから、庭木や盆栽として栽培されています。葉のわきや枝先に淡黄色の小花を咲かせます。花は数個の雄花を取り囲むように咲きますが、葉色とよく似ているため、よほど注意深く観察しないと気づかない地味な花です。

植物名の由来ですが、光沢のある厚い葉が層をなして次々についていく様を形容する「次」からの命名といわれます。また、葉を二つに割ってまたひっつけると、継げることからこの名がついたという俗説もあり、子どもの頃、一生懸命葉を割っては継ぎ、割っては継ぎして遊んだことを思い出します。なお、ツゲ科の常緑低高木には、生け垣などの植栽に用いられるヒメツゲや葉が大きいハチジョウツゲ、葉が橙色のサンゴジュツゲ、葉がやや大きく光沢が強いセイヨウツゲなどもあります。

材は黄白色または黄色、肌目は極めて精緻で割れにくい特徴をもち、日本産の木材のうちで最も緻密で均質な材質といわれます。このため、昔から櫛材として愛用さ



Buxus microphylla SIEB. et ZUCC.
var. *japonica* REHD. et WILS.
ツゲ

れてきました。また、浮世絵の版木や将棋の駒、算盤の玉、木管楽器、三味線や琵琶の撥、印判、定規、木象嵌などの特殊用途として用いられてきました。

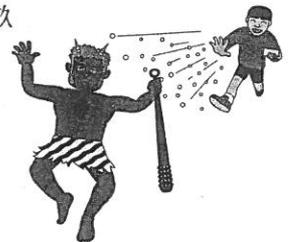
ふつう天然性のツゲは成長が極めて遅いので、100年以上のものを伐採し用いてきたようです。大きいものになると周囲1.5～1.7mで樹齢が300年以上というものもあり、伐採は秋から冬にかけて行われます。ツゲ材の生産地として有名なのが東京都の御蔵島です。御蔵島は、江戸の昔からツゲ材を売却することで村の財政が豊かになり、今でもツゲは島の貴重な森林資源として保護、増殖されています。

閑かさにひとりこぼれぬ黄楊の花

阿波野 青畝



公園だより



バラ園

年が明けても雪が少なく、岩見沢としては滅多にない、楽な元日から三が日を過ごさせて頂いたような気がします。しかし、8日頃からの大雪で、いっぺんにいつもの岩見沢の冬となりました。ところによっては雪害も起きているようです。バラ園のバラ達は厚い雪のフトンをかぶり、やっと深い眠りに入れたようです。今月は、寒さや積雪量の極値を記録する時期ですが、バラにも市民生活にもこれ以上の影響がでないことを祈りたいものです。

♥今月のバラ園からの一口メモは、バラの故郷についてです。ヨーロッパなどでは、古くからバラの栽培や品種改良が行われてきたことから、その故郷もこの辺りかと思われがちです。しかし、その起原はアジアのもので、ヒマラヤの西と東が故郷だと言われます。日本や中国、そして西アジアから小アジアに起原を持つバラが、ヨーロッパに持ち込まれ、自然交配、人工交配、突然変異などを経て多くの美しい品種が生まれてきたのです。このため、ギリシャ神話やルネッサンス絵画に見るように、バラは西洋の芸術のテーマとしてとり上げられ、故郷のアジアよりも一足早く、人々の生活の中に生きてきたといえます。

室内公園色彩館では、ヤブツバキやサザンカの花が終わり、かわって一足早く桃の花がほころび始め、館内に彩りを添えています。ライラックも花穂を伸ばしてきており、外の白銀の世界とは対照的に緑の芝生が、まぶしく輝いてみえます。今月は、外のバラたちは深い眠りに入っていますが、色彩館ではバラの花も楽しんで頂けます。また、間もなくサクラの花も見られることでしょう。

南国温室では、いよいよ三尺バナナの実の収穫時期です。レモン、ブンタンの実がたわわに実っています。パキスタキス、アンスリウム、ストレリチア・レギナエ（極楽鳥花）、サンタンカ、ランタナの花も咲いて、ここは南国、常夏の別世界です。

相 談 日 記

問 常緑広葉樹の葉について伺います。シャクナゲやツバキ、ヒイラギなど日本在来のほとんどの樹木の葉がつやつやしているのに対し、同じ常緑広葉樹でも、オリーブやゲッケイジュなど、地中海地方の常緑広葉樹の葉は、光が当たっても輝いて見えません。これは一体何が原因でしょうか？また、どうしてこのような違いがあるのでしょうか？

答 常緑広葉樹のなかでも、ツバキ、カシ、シイなどのように、葉に光が当たるとキラキラ反射する葉をもつものを照葉樹ともいいます。これら樹木の葉の表面には、クチクラという^{ろうじょう}蠟状の物質「クチン」でできた表皮層があります。この層は、葉の表面からの水の蒸散を防いだり、外からの汚染物質の流入や病害虫の侵入を防ぐ役割を果たしています。クチクラは乾燥した所に生える植物ほど発達しています。日本は雨が多いので、クチクラの厚さはそんなに厚くありませんが、雨に濡れても水が中にしみ込んだり、葉中のカリウムなどの養分が流れ去らないように、クチクラの表面をなめらかにして濡れにくくしているのです。葉を濡れにくくしているのは、雪が降ることとも深い関係があります。日本の雪は湿っていることが多いので、よく葉に付着します。そして夜間、気温が下がると凍ります。雪が凍るときに葉の中にまで水がつながっていると、葉の中の水まで凍ってしまい、組織が破壊されるおそれがあります。つややかな葉のクチクラ層はこれを防ぎ、雪が降っても葉が凍らないようにしているのです。

これに対して、オリーブやゲッケイジュなど、地中海地方に生える常緑広葉樹は、硬葉樹ともいわれます。地中海地方は、雨がとても少ないので、広葉樹（硬葉樹）はクチクラを厚くして、葉からの水分の蒸散を防いでいますが、クチクラの表面は凹凸が激しくなっています。これは、雨が降ったときに葉をぬれやすくして、葉の表面から水分を少しでも吸収したり、水分が蒸発するまでの間、大気の乾きをやわらげたり、葉面を冷やしたりする働きがあると考えられています。



年を通して窓辺を飾る人気の鉢花～ゼラニウム 花言葉 安楽な生活



フウロソウ科ペラルゴニウム属の半耐寒性多年草で、日照を好み乾燥には強いですが、高温多湿には弱い傾向があります。生育適温は12～20℃で、25℃以上になると生育が低下するので北海道向きの花といえます。ペラルゴニウム属にはいくつかの系統がありますが、特に秋まで繰り返し咲く四季咲の、一般にゼラニウムと呼ばれる、ゾナール系とアイビー

・リーブド系の2系統が人気です。江戸期にオランダから日本に入った、南アフリカ原産の花なのに、何故か天竺葵てんじくあおい（テンジク=インド）の日本名をもっています。また、葉の紋様や斑入りの品種は錦葉ゼラニウムと呼ばれ、古典園芸の1ジャンルとなっています。手入れのポイントは、日当たりのよい場所に置くことと、やや乾き気味に育てることです。過度の水やりは草丈が伸びすぎる原因です。水やりは土が乾いてから与えるようにしましょう。また、四季咲き性で次々に開花するので、時々、追肥を与えるようにします。

2～3月の園芸講座・行事案内

市民園芸講座の内容紹介

♣ 土壌と肥料管理のポイント

日時 2月 23日（水） 13:00～15:00

講師 農業改良普及センター 普及指導員 さん 定員 40人 参加料 無料

⊕ 第2回「いわみざわ洋らん展」

日時 2月 24日（木）9:00～ 27日（日）15:00

場所 室内公園「色彩館」ロビー 主催 いわみざわ洋らん愛好会

♣ 洋ラン栽培の楽しみ方

日時 2月 27日（日） 13:00～15:00

講師 北海道蘭友会理事 阿部 春樹 さん 定員 40人 参加料 無料

♣ 家庭果樹の楽しい管理

日時 3月 6日（日） 13:00～15:00

講師 中央農業試験場 井上 哲也 さん 定員 40人 参加料 無料

編集・発行 北海道グリーンランド（空知リゾートシティ株式会社）

お問い合わせは 室内公園「色彩館」緑の相談コーナー 25-6111 まで